

鞠智城跡(きくちじょうあと)第37次発掘調査概要

深迫門跡(ふかさこもんあと)周辺の調査

はじめに

唐居敷(からいしき)が「長者どんの的石」として知られていた。

*唐居敷・・・門の扉(とびら)の土台となる石。

(これまでの調査)

1次調査(1967年度)・・・深迫地区の地形調査と唐居敷周辺の調査

3次調査(1968年度)・・・深迫地区唐居敷周辺の追加調査

16次調査(1994年度)・・・谷頭全域の調査。版築土塁の確認。

28次調査(2006年度)・・・16次調査の確認とトレンチ調査による下層の確認調査。

◎これまでの調査成果

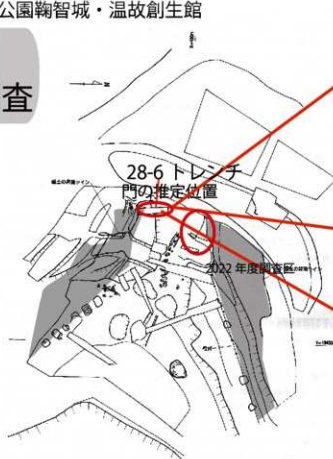
- (1) 鞠智城の最終段階の登城道の石敷きを確認。
- (2) 谷を狭めるために版築工法で造られた土塁を確認。
- (3) 北側及び南側土塁裾に柱間1.8mの柱柱を確認
- (4) 南側土塁は幅約6.7m、高さ約4.0m以上、北側土塁は4.0m以上であることを確認。

→高さについては、北の園路側にも版築が見られることから、高い土塁であったことは推定できていました。

◎2011年度 それまでの調査成果をまとめた総合報告書を刊行

2015年度 第3次鞠智城跡保存整備計画を策定

2020年度 計画に基づく深迫門跡の整備のための発掘調査開始



※調査全体の調査範囲は約110m、調査線は約16.9km(幅員約1.195m) 第16次までのトレンチ・・・第28次調査のトレンチ(調査線から中心部)

第21図 遺構配置図



1 門推定地南側土塁の状況

門推定地の南側土塁の築造方法が断面で観察できました。

地山を直に削って下部は白色土を中心とした版築、上部を黒褐色系の土で版築しています。

門道付近は、埋められていて、北側の深い部分では約2m下から丸石が2点見つかっており、古い時期の門道の高さと推定しています。



○ 推定登城道面

2 門推定地北側土塁の状況

門推定位置の追加調査・再検討と北側土塁から門道にかけての構築技術の調査



35-3 トレンチ東側拡張調査区



35-3 トレンチ石積み検出状況(南から)



◎門推定地周辺の土層構築技術が判明（3段の石積上部の土層の状況）

*土層を造るには、何段階も工程が伺えます。

また、盛土や版築技法など様々な種類があることがわかりました。

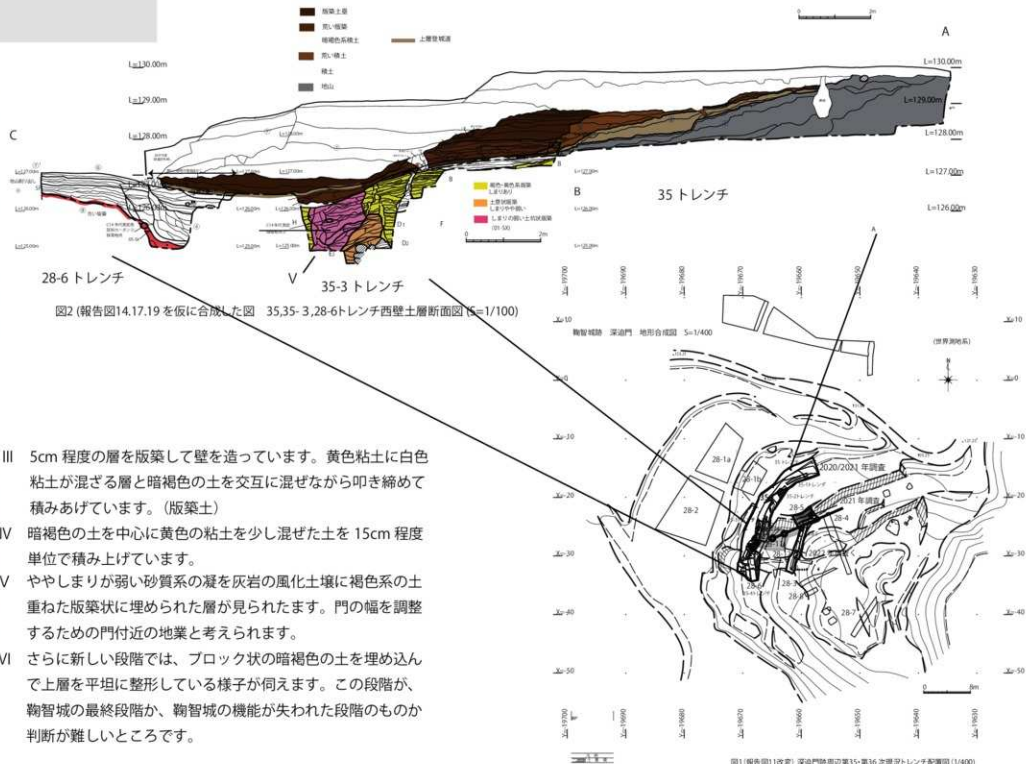
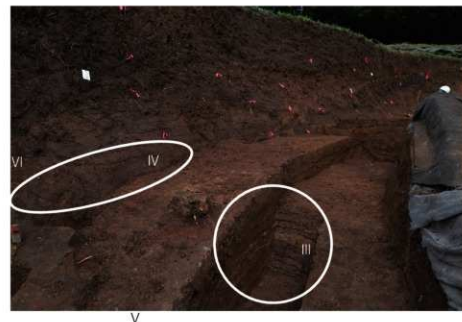
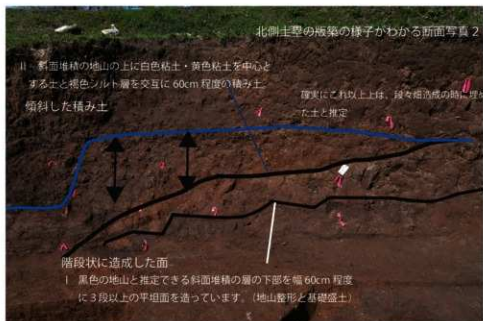
◎版築（はんちく）と盛土

版築・・・違う種類の層を交互に積み上げて、突き固めて強固な地盤を造る技術。中国から朝鮮半島を経由して伝わった技術と考えられています。

盛土・・・削った土（切土）を盛って造成する土。突き固めた版築土層締まっています。版築の基礎や土層を保護するために盛土工法を使う事例が報告されています。

◎今回の調査で判明したこと。

- (1) 鞠智城跡深迫門の北側土塁の下部で、2から3段の石積み確認。他の土塁の基底より丁寧な石積みであることから、門道に伴うものと推定されます。その門道側で河原石を確認しましたが、これは古い時期の門道の面と考えられます。
- (2) 門道を造るために何段階もの版築土塁が見られます。下側のトレンチ（28-5トレンチ）では、色味が異なる土を用いた版築土塁が観察できます。
- (3) 版築工法で土層を造る際、土が崩れないよう板を据えるための柱穴を再確認しました。今後柱の配置を検討して土塁のラインの検討を行う予定です。



- 5cm程度の層を版築して壁を造っています。黄色粘土に白色粘土が混ざる層と暗褐色の土を交互に混ぜながら叩き締めて積みあげています。(版築土)
- 暗褐色の土を中心に黄色の粘土を少し混ぜた土を15cm程度単位で積み上げています。
- ややしまりが弱い砂質系の凝り灰岩の風化土壌に褐色系の土重ねた版築状に埋められた層が見られます。門の幅を調整するための門付近の地業と考えられます。
- さらに新しい段階では、ブロック状の暗褐色の土を埋め込んで上層を平坦に整形している様子が伺えます。この段階が、鞠智城の最終段階か、鞠智城の機能が失われた段階のものが判断が難しいところです。